

産地の研究室から/地域ブランドを育てる(7)

リレー随筆

薬草セネガ

(兵庫県立中央農業技術
センター農業試験場園芸部薬草試験地 はま だ げん いち 浜田憲一)

薬草栽培の歴史

兵庫県水上郡山南町は、古くから丹波オウレンの産地として知られたところである。同町の西部に位置する和田地区は、加古川の支流牧山川の両岸に広がる緩やかな傾斜地で、土壤に砂礫を多量に含み水もちが悪いため、水田に適さない土地が大半を占めていた。今から150年前(江戸天保年間)、この地に導入されたオウレン(生薬名：黄連、利用部位：根茎、薬効：健胃・整腸)は、桑園の間作として栽培が定着し、地域の重要な換金作物となった。明治末期にはサフラン(生薬名：サフラン、利用部位：雌しべ、薬効：鎮静・鎮痛・通経)が、さらに昭和になってセネガ(生薬名：セネガ、利用部位：根、薬効：鎮咳・去痰)が導入された。サフランは一時的に栽培面積が急増したものの、まもなく連作障害のために壊滅し、長らく隆盛を誇ったオウレンも近年中国からの輸入が増大し、販売価格が大幅に下落したため、生産量は下降の一途をたどっている。一方、セネガは当地の気象、土壤条件に適合したことと、先人達のひた向きの努力がみどり、現在、オウレンに代わる地域の基幹作物となっている。

セネガの生産、流通の状況

セネガは北米大陸を原産とし、先住民のセネカ族が古来毒蛇の咬傷治療に用いてきた薬草といわれている。原産地は比較的冷涼な気候であるが、温度に対する順応性は広く、暖地でも栽培ができる。兵庫県以外

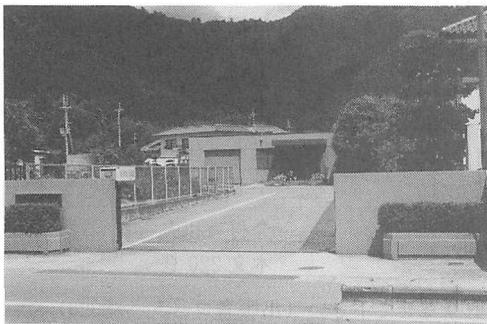
では北海道などで栽培がみられるが、いずれも量的にはごくわずかで、国内生産の大半は山南町産が占めており、平成4年度の生産量は約10t(栽培面積7ha)である。

11月頃収穫されたセネガ根は、水洗、天日乾燥された後、地元の農協、または薬種商の手を経て、大阪の薬種問屋に集められ、さらに製薬会社へと販売される。主として咳止めのシロップ剤に加工され、セネガを配合した薬は、病院薬や薬局での一般薬として安定した需要がある。国内生産だけでは需要を満たさず、不足分はカナダやアメリカ合衆国からの輸入(栽培品ではなく、野生品)に頼っているのが現状である。

薬草試験地の概要と研究への取り組み

当試験地は、「漢方の里」を看板にかかげる地元山南町の強い要望により、昭和60年に誕生した。加西市にある県立中央農業技術センターの農業試験場園芸部に所属し、研究員1名、嘱託職員1名だけのきわめて小規模な研究機関である。すぐ近くには町営の薬草、薬樹公園があり、来訪者は公園の方で多種、多様な薬用植物に接することができる。

設立当初、解決を求められた重要課題は、「セネガの連作障害の原因究明と防止対策」である。連作圃場では生育、収量の著しい低下が目立ち、実態調査の結果、黒根病(*Thielaviopsis* 属菌)が主原因の一つで、根腐れ症(*Cylindrocladium* 属菌)や立ち枯れ症(*Fusarium* 属菌)などの土壤伝染性病害による被害もみられた。薬剤を利用した防止対策として、キャプタン・チアベンダゾール剤などによる種子消毒、ダゾメット剤による土壤消毒、チオファネートメチル剤やトリフルミゾール剤による土壤かん注処理の効果を認めた。しかし、対象作物が生薬として利用される薬草で



兵庫県立中央農業技術センター薬草試験地の全景



セネガの栽培状況(6月下旬)

あり、また、実用化には農薬登録というハードルがあるため、現場では耕種的な対応が望まれた。その後、水稲と輪作すると連作障害がかなり軽減されることがわかり、最近ではほとんどの農家で田畑輪換が取り入れられている。

セネガ栽培のもう一つの課題は、「管理の省力、軽作業化」である。播種、除草、収穫・調整などに相当の労力を要し、いずれも手作業が中心で、特に雑草防除は、炎天下で腰をかかめての手抜き除草が行われている。現在、重労働からの解放を図るべく、マルチや除草剤を利用した雑草防除法を検討している。その他セネガに関しては、「種子の発芽生理と好適貯蔵条件」、「播種量、播種時期と生育、収量」、「施肥体系の確立」など、産地が抱えている様々な課題の早期解決をめざした試験研究に取り組んでいる。

今後の展望

当地では、オウレンやセネガなど既存の薬草以外に、数年前からトウキ、ミシマサイコ、ナンテン、カリンなどの新規薬草、薬樹を導入し、適応性を検討しているが、収益性を含めた総合評価でセネガに匹敵するものが今のところ見当たらない。したがって、当面はセネガ中心の産地体制を維持、強化し、その安定多収と省力化に努める必要がある。作業従事者の高齢化が年々進み、若い後継者の確保が強く望まれているが、現実はなかなか困難な状況である。薬草づくりに中高年や女性のパワーを積極的に生かしていける栽培



収穫後、水洗いしたセネガ根

技術の開発が、私たち研究者に託された今後の課題と思われる。ある生産者が、「セネガづくりは除草が大変やけど、我々年寄りの小遣い稼ぎにはちょうどええ仕事や」と言われていたが、栽培を少しでも快適に、そしてもうけを小遣い銭以上のものにしていきたいと願っている。

最近、セネガの薬理作用について新しい知見があった。昨秋開かれた生薬分析シンポジウムでの報告によれば、セネガに含まれるサポニンにこれまで知られていた鎮咳、去痰作用以外に、アルコール吸収抑制と糖吸収抑制作用が認められたとのこと。実用化への道は遠いかもしれないが、セネガ栽培に携わる者として新たな希望を感じる話題である。

本会発行の最新刊図書：植物保護ライブラリー

各冊 B6版 定価 1,300円 (本体価格 1,263円) 送料 240円

「イネいもち病を探る」	—研究室から現場まで—	小野小三郎 著 口絵カラー2頁 本文174頁
「作物の病気を防ぐくすりの話」		上杉 康彦 著 本文121頁
「虫たちと不思議な匂いの世界」		玉木 佳男 著 本文187頁
「日本ローカル昆虫記」	—虫の心・人の心—	今村 和夫 著 本文220頁

お申し込みは、直接本会出版部に申し込むか、お近くの書店で取り寄せて下さい (出版者コード：88926)

社団法人日本植物防疫協会 〒170 東京都豊島区駒込 1-43-11 TEL：(03)3944-1651 FAX：(03)3944-2103